

2000 年＝13 億人→2010 年＝14 億人→2020 年＝15 億人→2030 年＝16 億人

すなわち、人口の増加数を 10 年間で 1 億人以内に抑え、2030 年には 16 億人に留めるという計画である。最初の関門であった「2000 年 13 億人」以内という目標は、約 2300 万人の余裕を残して達成している。表 1－2 のように自然増加率も低下を続けており、その結果として年間人口増加数も 1000 万人を切っていることから、人口計画の達成は可能であろうし、また、2030 年以降はマイナス成長も予測できる状況である。

2. 農業生産の状況

これまで、中国の農業生産力の高さを示すために良く使われた表現は、「世界の 7 % の農地で、世界の 22 % の人口を養っている」という言い方である。「良く使われた」と過去形にしたのは、後述のように、農地面積が全国悉皆調査によってこの表現が考え出された時点より 3 割も大きいことが判明し、その結果、この表現が正確ではなくなり、あまり使われなくなったことによるものである。とはいえ、農地面積が世界の 8 % にしろ、9 % にしろ、世界に占める農地面積の割合が人口の占める割合より低ければ、中国の農業生産力が世界平均より相当高いと評価することができる根拠となるものである。

1978 年の改革開放政策実施以降の主要農産物の生産は表 2－1 のように推移している。

なお、1978 年～2001 年の間の人口の伸び率は、

$$12 \text{ 億 } 7627 \text{ 万人} \div 9 \text{ 億 } 6259 \text{ 万人} = 1.326$$

となっている。

表 2－1 主要農産物の生産量の推移（単位：万ト）

	食糧	油料作物	サウキ	果物	肉類	牛乳	水産物
1978 年	30477 (100)	521.8 (100)	2111.6 (100)	657.0 (100)	1062.4 (100)	114.1 (100)	466.0 (100)
1985 年	37911 (124)	1578.4 (302)	5154.9 (244)	1163.9 (177)	n.a. —	249.9 (219)	705.0 (151)
1999 年	50839 (167)	2601.2 (499)	7470.0 (354)	6237.6 (949)	5820.7 (548)	717.6 (629)	4122.4 (885)
2000 年	46218 (152)	2954.8 (566)	6828.0 (323)	6225.1 (948)	6125.4 (577)	827.4 (725)	4278.5 (918)
2001 年	45264 (149)	2864.9 (549)	7566.3 (358)	6658.0 (1013)	6333.9 (596)	1025.5 (899)	4381.3 (940)
01/00	(98)	(97)	(111)	(107)	(103)	(124)	(102)

注：肉類の 78 年欄は 79 年の、牛乳の 78 年欄は 80 年の数値。

出所：『中国統計年鑑』各年版。肉類は 2002 年版（版によって数字に変更）。

表 2－1 を眺めるポイントは、各農産物の伸び率がこの「1.326」を上回っているか否かである。この伸び率を上回っていれば、一人当たり供給量の現状維持という必要最低限の

責任は果たしていると言えるからである。

表 2－1 を概観すると、取り上げた主要農産物はいずれもこの人口伸び率「1.326」を大きく上回っていることは一目瞭然である。

ただし、これらの主要農産物の生産状況は、品目によって相当異なっているので、以下でそれぞれの状況を大まかではあるが見ていこう。

(1) 食糧

中国で使われる「食糧」という概念には、穀類、豆類、イモ類が含まれる。ただし、イモ類は実生産量の 5 分の 1 をカウントしている。例えば、イモ類の実生産量が 1 億トであった場合、食糧生産量としては 2000 万トとして計上される。逆に食糧生産量にイモ類が 2000 万ト計上されていれば、この場合のイモ類の実生産量は 1 億トである。イモ類の場合、実生産量の 5 分の 1 のみがカウントされるのは、その澱粉含有率に着目しているからだとされている。

また、米の生産量は籾ベースである。

1) 食糧生産全体の状況

最近の中国の食糧生産は、表 2－1 の主要農産物の中では特異な動きを示しているので、以下その状況をやや詳しく見てみよう。95 年以降の中国食糧生産量は表 2－2 のように推移している。

表 2－2 中国の食糧生産量の推移（単位：億ト）

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
生産量	4.6662	5.0454	4.9417	5.1230	5.0839	4.6218	4.5264	4.5750
増減率	100.0	108.1	105.9	109.8	109.0	99.0	97.0	98.0

出所：『中国統計年鑑』各年版。2002 年（予測）は国家統計局ホームページ。

表 2－2 に見るように、96 年～99 年の間は概ね 5 億トの水準を継続した。この結果、食糧需給バランスは大きく崩れ、価格は著しく低迷するとともに、在庫量も膨大となった。こうした状況を受けて、食糧生産から他の作目への転換等を内容とする「農業の戦略的構造調整」が進められることとなった。つまり、生産過剰になったので、人為的に食糧生産量を減少させたのである。農地面積の減少や災害等によって、中国政府の希望に反して減産したものではない。この点はしっかりと銘記しておくことが必要である。そうでないと、長期見通しをするときに大きな錯誤要因になるからである。ただし、これは「量」の面での話であり、「質」の面では依然として問題が存在している。

「農業の戦略的構造調整」推進の結果、2000 年以降の食糧生産量は 95 年の水準以下で推移しているが、食糧の需給上は何ら問題は生じておらず、また、食糧の価格は低迷を続けており（最近になってやっと回復の兆しを見せている）、食糧輸入量も増大せず、逆に減少している。

2) 食糧の品目別状況

品目別の食糧生産の状況は表 2－3 のようである。

表 2－3 品目別食糧生産状況（単位：万トン）

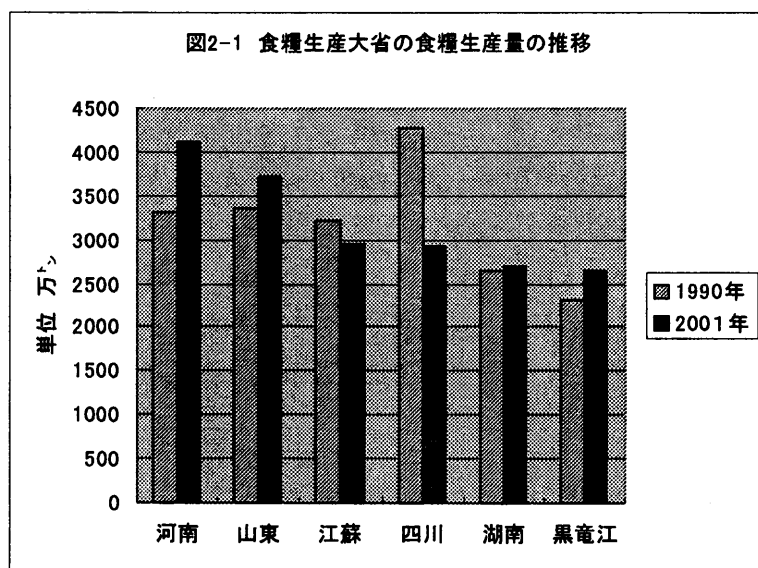
年次	食糧計	米	小麦	トウモロコシ	大豆	イモ類	その他
1978 年	30477	13693	5384	5595	757	3174	1874
	(100%)	(44.9%)	(17.7%)	(18.4%)	(2.5%)	(10.4%)	(6.1%)
1990 年	44624	18933	9823	9682	1100	2743	2343
	(100%)	(42.4%)	(22.0%)	(21.7%)	(2.5%)	(6.1%)	(5.3%)
2001 年	45264	17758	9387	11409	1541	3563	1606
	(100%)	(39.2%)	(20.7%)	(25.2%)	(3.4%)	(7.9%)	(3.5%)
(01/78)	1.49	1.30	1.74	2.04	2.04	1.12	0.86

出所：『中国統計年鑑』各年版。

品目別には、小麦、トウモロコシ、大豆の伸びが大きい。米、イモ類は増大はしているものの、食糧全体の伸び率より低くなっている。減少しているのは、「その他」だけであるが、これには、雑豆や粟、高粱等の雑穀が含まれる。

3) 各省別の食糧生産状況

各省別の食糧生産状況は別表 2－1、図 2－1 のように推移している。



別表 2－1 に見るように、食糧生産が多いのは、河南、山東、江蘇、四川、湖南、黒竜江、安徽、河北、湖北、吉林である。これらの省は 2001 年の上位 10 省であるが、90 年でも上位 10 省を構成している省である。ただし、個々の順位は若干異なっている。

これらの省名を眺めていて気がつくのは、人口の多い省が多いことである。これらの省の 2001 年の食糧生産の順位と人口の順位を並列すると次のようである。

省名	食糧生産量順位	人口数順位
河南	第 1 位	第 1 位
山東	第 2 位	第 2 位
江蘇	第 3 位	第 5 位
四川	第 4 位	第 3 位
湖南	第 5 位	第 7 位
黒竜江	第 6 位	第 15 位
安徽	第 7 位	第 8 位
河北	第 8 位	第 6 位
湖北	第 9 位	第 9 位
吉林	第 10 位	第 21 位

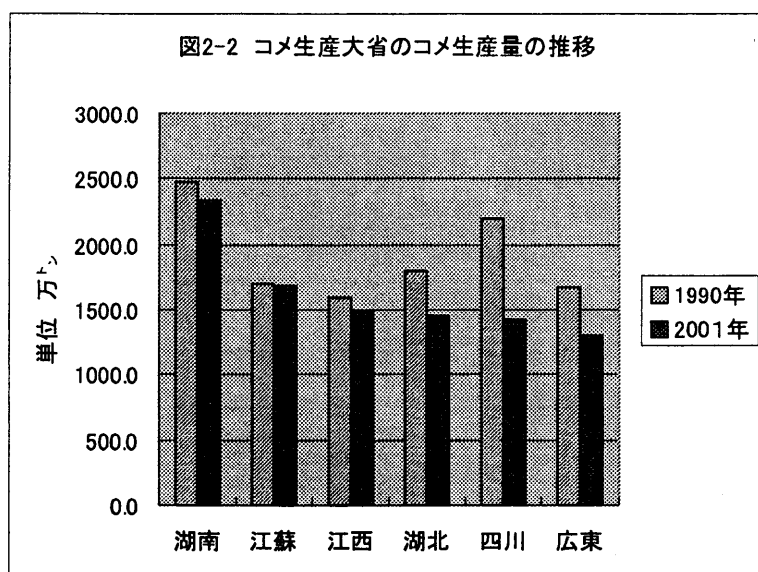
このように食糧生産量の順位と人口数の順位を比較したのは、食糧生産量が大きいからといって、そのことが直に他省への食糧供給力が大きいことを示すものではないことに注意しておくことが必要であるからである。

4) 米の各省別生産状況

最近中国の東北地方での米の生産量が急速に増大していることが、ある種の「懸念」を持って語られるようになっているので、米の各省別生産量を見ておこう。

米の各省別生産状況は別表 2-2、図 2-2 のようである。

別表 2-2 で、東北 3 省、即ち、遼寧、吉林、黒竜江の米の生産状況を見てみると、90 年と 2001 年を比較した場合、大きく伸びているのが黒竜江省であり、吉林省は若干伸びているが、遼寧省は減少という結果となっている。言われている「東北地方の米の増大」とは、主として黒竜江省がその本体であることが分かる。別表 2-2 に見るように、同省はこの 11 年間で実に 700 万トンの米を増産しているのである。しかも、同省の米はジャポニカ米であるので、ある種の「懸念」が囁かれるのも頷ける現状である。同省の米の生産が伸びたのは、市場経済化によるところが大きいと言われている。つまり、これまで低湿地でも無理して小麦やトウモロコシを作っていたのを低湿地により適した米を作るようになったことである。



5) 中国の食糧消費問題

中国の食糧問題には、今後の経済発展に伴って肉類の消費量が増大し、その結果、飼料用穀物需要が膨大なものとなり、世界の食糧市場を攪乱させるとするいわゆる「中国食糧脅威論」が常に付きまとっている。この種の議論のタチが悪いのは、30年ぐらい先のことを懸念したふりをして「中国脅威論」を振りまくことである。そこで、中国の食糧消費状況を見ておこう。

ア. 直接消費状況

第1は、食糧の直接消費についてである。中国の統計の制約上、都市住民と農民とに分かれているが、食糧の直接消費量は表2-4のように推移している。表2-4を見る上での注意点は、都市住民の場合は購入量であること、農民の場合は消費量であることである。また、表2-4の表側にある「貿易糧」とは、流通や取引段階で使われる概念であり、「籾無し食糧」と考えると分かりやすい。同じく表2-4の表側にある「原糧」とは、「籾付き食糧」と考えると分かりやすい。ただし、表2-4の原糧を貿易糧に換算するのは至難の業である。表2-4の原糧の構成内容が分かっていないからである。

表2-4 最近の1人当たり年間食糧直接消費量の推移 (単位: kg)

年次	1985年	1990年	1995年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
都市住民 ・貿易糧	134.76 (100)	130.72 (97)	97.00 (72)	88.59 (66)	86.72 (64)	84.91 (63)	82.30 (61)	79.69 (59)
農民 ・原糧	257.45 (100)	262.08 (102)	258.92 (101)	250.67 (97)	249.28 (97)	247.45 (96)	249.49 (97)	237.98 (92)

出所:『中国統計年鑑』各年版。

表 2－4 に見るように、都市住民の方は食糧の直接消費量は一貫して減少を続けており、食生活の高度化が進んでいることを示している。他方、農民の方は傾向としては減少傾向にあるといえるが、その減少度合いは顕著なものとなっていない。なお、表 2－4 では、農民と都市住民との間で食糧の直接消費量に大きな差があるが、この差には前述のような「貿易糧」と「原糧」との差も含まれていることに注意しておくことが必要である。

イ．間接消費状況

間接消費量で考察すべきことは、肉類消費量の動向である。そこで、中国の一人当たり食糧生産量、肉類総生産量、一人当たり肉類供給量（わが国の「食料需給表」でいう純食料供給量ベース）及びわが国の純食料供給ベースでの一人当たり肉類供給量を整理し、取りまとめたのが表 2－5 である。この整理では、日中間での肉類の消費量を比較することも目的としている。

表 2－5 一人当たり肉類供給量と食糧生産量の推移

項 目	単位	96 年	97 年	98 年	99 年	2000 年	2001 年
1 人当たり食糧生産量	単位	414.4	401.7	412.4	405.6	365.9	355.9
肉類総生産量	万トン	4584.0	5268.8	5723.8	5820.7	6125.4	6333.9
1 人当たり肉類供給量	kg	27.1	30.8	33.2	33.5	34.9	35.9
日本の上記対応数字	kg	28.1	27.8	28.1	28.5	28.8	n.a.

出所：『中国統計年鑑 2002』、『食料需給表』。

表 2－5 で注目すべきことは、先ず、一人当たり肉類供給量は、97 年以降中国の方がわが国を上回っていることである。次に、このような中国の肉類供給量を可能にする飼料穀物も含めた食糧生産量の水準は、400 kg、さらには 400 kg 未満でも十分であるということである。つまり、一人当たり食糧生産量が 400 kg 程度あれば、現在の水準の肉類生産は可能ということである。

そして、次の問題は中国人の肉類消費量がどこまで伸びるかである。これには諸説あるが、中国人の平均的体格と日本人の平均的体格はそれほど差はないこと、中国でも都市部では既に成人病（生活習慣病）が社会問題化していること等を考慮すると、現在の水準の肉類生産量で十分と考えるのが妥当であろう。そうすると、30 年先の中国でも飼料用穀物需要の爆発的増大はありえないこととなる。一人当たり 400 kg の水準で人口増大分だけ増産すれば良いことになるからである。

なお、中国の肉類消費量を考察するに留意すべき点を 2 点ほど付言しておく。

第 1 は、以上の計算には家畜の内臓の消費量は含まれていないことである。わが国では内臓の消費量はそれほど多くはないと思われるが、中国の場合はほとんど食用に供していることである。この内臓消費も肉類消費に入れば、一人当たり肉類消費量は表 2－5 の数字より 2 割程度は上がることとなろう。

第2は、上記の計算では、流通を含めた「分配」のことは考慮していないことである。上記で見た食糧消費の場合と同様に、肉類についても一人当たりの消費量（都市住民の場合は購入量）の統計があるが、これらの数字は、上記の計算より相当低くなっている。上記の計算による数値と消費量統計の数値との差についての説明も重要な研究課題ではあるが、本稿では指摘だけに留めておく。

（2）油料作物

1）全国の生産状況

中国の油料作物の概念はわが国と異なっている。端的に言えば、大豆が豆類に入られていて食糧作物とされているが、落花生は豆類ではなく、油料作物に入られていることである。ただし、これは統計上のことであり、大豆で搾油用に回されるものがあるのは当然のように、落花生にも食用に回されるものがあるのも当然のことである。

さて、中国の油料作物の大宗は、落花生、菜種、ゴマである。なお、ゴマは現代中国語では「芝麻」と表記される。中国の統計書に「胡麻」という作物が出ているが、これはわが国で言うゴマではなく、エゴマのことである。中国の油料作物全体と大宗油料作物3品目の生産量は表2-6のようである。

表2-6 品目別油料作物生産状況（単位：万ト）

年次	合計	落花生	菜種	ゴマ	その他
1978年	521.1	237.7	186.8	32.2	64.4
	(100%)	(45.6%)	(35.8%)	(6.2%)	(12.4%)
1990年	1613.2	636.8	695.8	46.9	233.7
	(100%)	(39.5%)	(43.1%)	(2.9%)	(14.5%)
2001年	2864.9	1441.6	1133.1	80.4	209.8
	(100%)	(50.3%)	(39.6%)	(2.8%)	(7.3%)
(01/78)	5.50	6.06	6.07	2.50	3.26

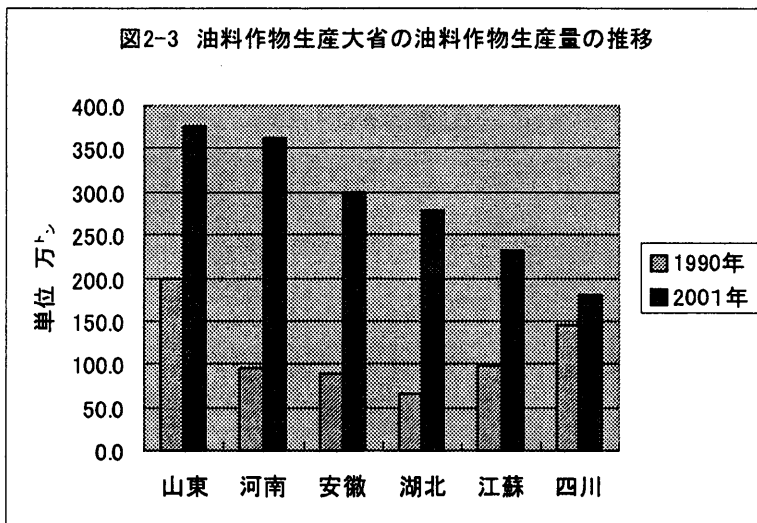
出所：『中国統計年鑑』各年版。

表2-6にみるように、油料作物の中では、落花生と菜種のシェアが増大する一方、ゴマと「その他」のシェアが減少している。「その他」の中での主要なものは、ヒマワリとエゴマ〔胡麻〕である。なお、搾油原料としては、落花生、菜種、ゴマ、ヒマワリ、エゴマの他に、前述のように大豆があり、さらに棉実も搾油原料となっている。

2）各省別の生産状況

各省別の油料作物の生産状況は別表2-3、図2-3のようである。

別表2-3に見るように、油料作物の生産大省は山東、河南、安徽、湖北、江蘇、四川、河北、湖南（以上は2001年の生産量が100万ト以上の省）と言えよう。



(3) 糖料作物

1) 全国の生産状況

中国の糖料作物の大宗は甘蔗と甜菜である。糖料作物全体と甘蔗、甜菜のそれぞれの生産量は表2-7のように推移している。

表2-7 品目別糖料作物生産状況 (単位: 万トン)

年次	合計	甘蔗	甜菜
1978年	2381.8	2111.6	270.2
	(100%)	(88.7%)	(11.3%)
1990年	7214.5	5762.0	1452.5
	(100%)	(79.9%)	(20.1%)
2001年	8655.2	7566.3	1088.9
	(100%)	(87.4%)	(12.6%)
(01/78)	3.63	3.58	4.03

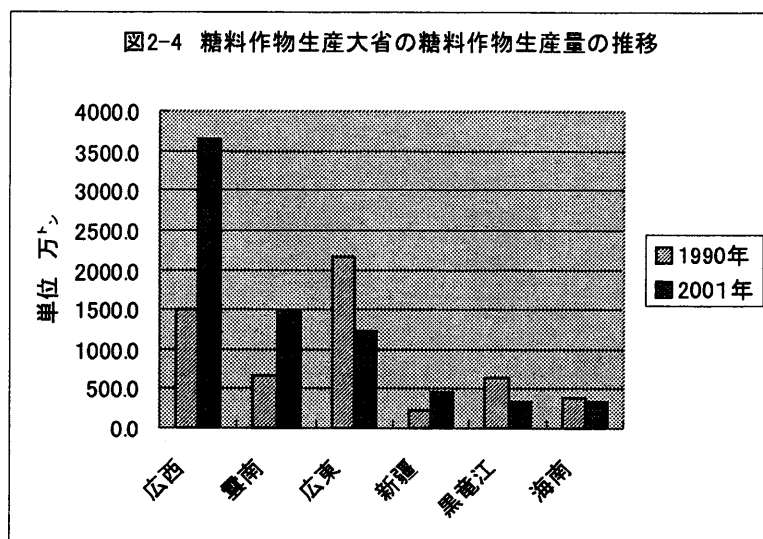
出所:『中国統計年鑑』各年版。

表2-7で注目すべきことは、甘蔗と甜菜の割合の変化である。90年には甜菜のシェアは20%を占めたが、現在は12%台にまで縮小している。

また、糖料作物で注意しておくべきことは、糖料作物も過剰で、現在製糖業の構造調整が行なわれていることである。この構造調整は2001年までに既に一応の効果を上げたが、その結果、砂糖価格が回復したため、2002年には既に糖料作物の過剰生産が懸念される状況となっていることである。

2) 各省別の生産状況

各省別の糖料作物の生産状況は別表 2－4、図 2－4 のようである。



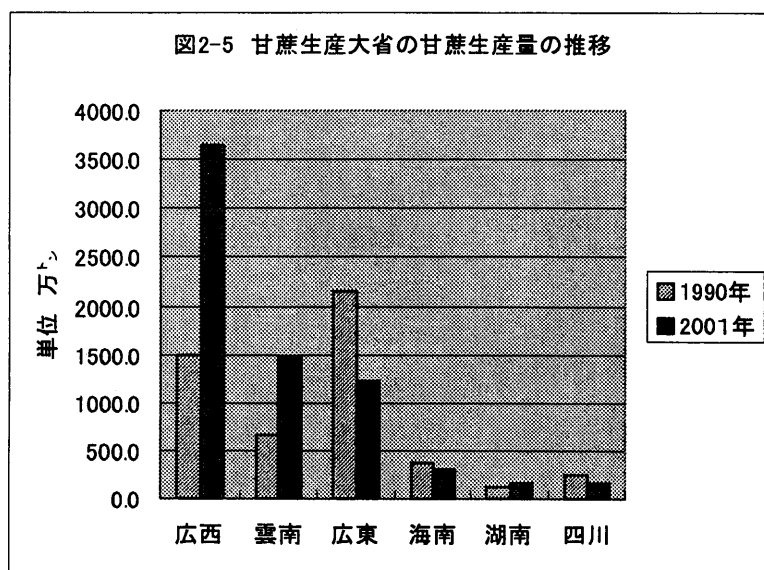
ところで、中国の糖料作物は甘蔗と甜菜であり、別表 2－4 も甘蔗と甜菜の生産量を合計したものである。そして、中国の場合は、甘蔗は主として南方地域で生産されており、一方、甜菜は北方地域で生産されており、甘蔗生産の省と甜菜生産の省とは画然と区分されているといっても良い状況である。こうした状況を考慮すると、甘蔗と甜菜を加えた糖料作物の生産量で各省の動きを見るよりも、甘蔗と甜菜を区分してそれぞれについて各省の動きを見た方が実態の把握が容易になると思われる。そこで、以下では、甘蔗と甜菜に分けて見ていくこととする。

ア. 甘蔗の各省別生産状況

甘蔗の各省別生産の状況は別表 2－5、図 2－5 のようである。同表に見るように、2001 年で甘蔗を生産している省は 17 であるが、主体は華中、西南地区であり、中でも際立って大きいのが広西、雲南、広東である。この 3 省の中でも増大が著しいのは広西と雲南であり、広東は逆に減少している。広東で甘蔗生産が残っているのは雷州半島の地域であるが、この地域では他に替わる農作物が無いために甘蔗生産が続けられていると言われている。広西や雲南でもこのような事情にある生産地が多いとされている。つまり、甘蔗生産が一種の貧困対策の役割を果たしているので、経済合理性だけで甘蔗生産の方向を決めることが出来ない事情にあるということである。

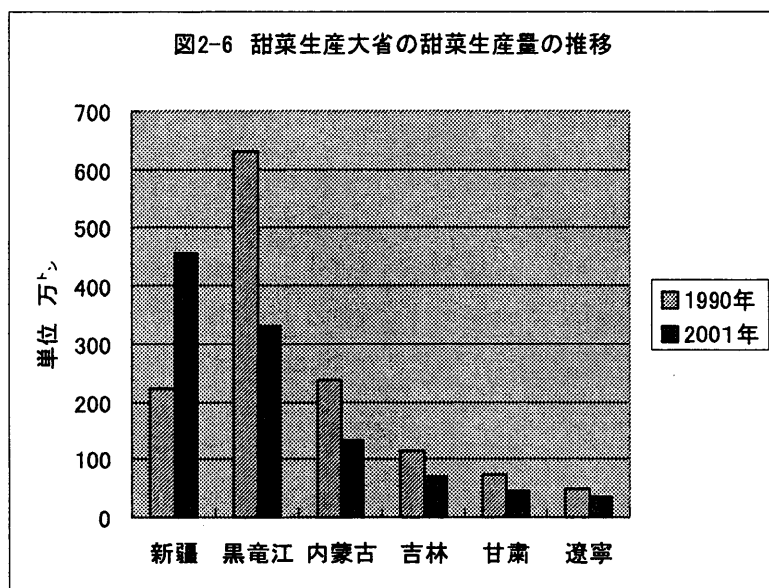
なお、甘蔗には「糖蔗」(sugar cane)と「果蔗」(fruit cane)との区別がある。前者は製糖用のものであり、後者は生食用のものである。統計では両者を合せて「甘蔗」として計上しているが、区分している省の統計もある。例えば、『広東統計年鑑』では、両者を甘蔗の内訳として計上している。2001 年の場合を例示すると、糖蔗が 1073.38 万ト、果蔗が 139.65 万ト、これらを合計した甘蔗が 1213.03 万トと掲載されている。2001 年の生産量で

は、糖蔗の方が圧倒的に多いが、糖蔗は減産傾向を示しているのに対して、果蔗は顕著な増大を示している。生産量の少ない省の甘蔗は、製糖用の糖蔗ではなく、果蔗であることが推測されるが、確証は取っていない。



イ. 甜菜の各省別生産状況

甜菜の各省別生産状況は別表2-6、図2-6のようである。甜菜の生産地域は、北方地域が主体である。2001年の実績では、全国で14の省が生産をしたが、生産大省は新疆、黒竜江、内蒙古の3省である。この3省の中でも、新疆と黒竜江の2省の規模が内蒙古を大きく離れているという状況である。また、新疆と黒竜江の2省を比較してみると、新疆が著しく生産を増大させているのに対して、黒竜江は著しく生産を減退させているという相反した状況となっている。さらに、1990年と2001年を比較してみると、生産量を伸ばしたのは唯一新疆のみという状況である。今後は、西北地域では新疆が単独で残ることは確実であるが、東北、内蒙古では製糖業再編の方向によって相当な調整（減産）が行なわれることが考えられる。



(4) 果実

1) 全国の生産状況

果実の主要品目別の生産状況は表2-8のようである。中国の果実の主要品種は、表2-8に掲げられているように、リンゴ、柑橘、ナシ、ブドウ、バナナである。これらの果実は、『中国統計年鑑』で毎年全国生産量が公表されているものである。これらの5品目に次ぐものとしては、パイナップル、ナツメ〔紅棗〕、柿がある。これらの3品目については、『中国農村統計年鑑』、『中国農業年鑑』で同じく毎年全国生産量が公表されている。2001年からは、さらに、荔枝、龍眼、桃、キウイの全国統計についても、『中国農業統計資料』では公表するようになっていく。ちなみに付言しておく、キウイの原産地は中国である。中国語ではキウイを「獼猴桃」という。

表2-8 品目別果実生産状況 (単位: 万ト)

年次	合計	リンゴ	柑橘	ナシ	ブドウ	バナナ	その他
1978年	657.0	227.5	38.3	151.7	10.4	8.5	220.6
	(100%)	(34.6%)	(5.8%)	(23.1%)	(1.6%)	(1.3%)	(33.6%)
1990年	1874.4	431.9	485.5	235.3	85.9	145.6	490.2
	(100%)	(23.0%)	(25.9%)	(12.6%)	(4.6%)	(7.8%)	(26.2%)
2001年	6658.0	2001.5	1160.7	879.6	368.0	527.2	1721.0
	(100%)	(30.1%)	(17.4%)	(13.2%)	(5.5%)	(7.9%)	(25.8%)
(01/78)	10.13	8.80	30.31	5.80	35.38	62.02	7.80

出所:『中国統計年鑑』各年版。

表2-8からは、中国の果実生産は順調な増大を続けているように見える。しかしながら、中には既に過剰となっているものもある。その典型がリンゴである。そこでリンゴの最近の生産量を示すと表2-9のようである。

表2-9 中国のリンゴ生産量の推移（単位：万ト）

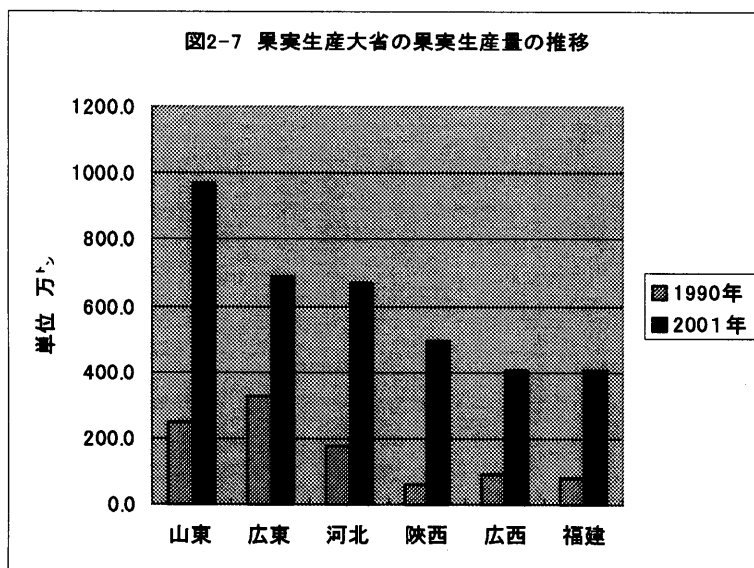
年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
生産量	1400.8	1704.7	1721.9	1948.1	2080.2	2043.1	2001.5
増減率	100.0	121.7	122.9	139.1	148.5	145.9	142.9

出所：『中国統計年鑑』各年版。

表2-9に見るように、中国のリンゴは1999年の2080万トをピークにして、その後は減少を続けている。最大の原因は過剰による価格低迷であるが、他の果実の増産もあるため、低品質のものは消費者から相手にされなくなっていることも大きな原因の一つである。作れば売れると言う「不足の時代」の観念はもはや消費者には通用しなくなっているのである。

2) 各省別の生産状況

各省別の果実の生産状況は別表2-7、図2-7のようである。別表2-7に見るように、果実の生産大省は、山東、広東、河北、陝西、広西、福建、河南（以上は300万t以上の省）となっている。ただし、これらの省の主要果実は相当異なっている。山東の主要果実はリンゴであり、広東はバナナ、柑橘であり、河北は梨とリンゴ、陝西はリンゴ、広西はバナナと柑橘、福建は柑橘、河南はリンゴとなっている。



(5) 肉類

1) 全国の生産状況

肉類の主要品目別全国の生産量は表2-10のように推移している。中国語で「肉」と言えば豚肉を指すように、中国の肉の大宗は豚肉である。しかしながら、穀物を人間と豚とが争う事態を回避しようとの考え方もあって、草食の家畜や飼料効率の良い家禽肉の増産に力が入られるようになっており、その結果、表2-10に見るように、豚肉のシェアは低下する一方、反面、牛肉、羊肉、家禽肉のシェアが大きく増大している。特に牛肉の伸びが大きい。この増大は、収穫後の農作物の茎や葉等の残滓に尿素を塗して発酵させたものを飼料にする飼養方法が普及したことによるところが大きい。草地による放牧だけではこれだけの増産をするのは難しいことである。

また、「羊」という言葉には注意が必要である。中国語で「羊」(yang)といった場合、日本と異なって、「ヒツジ」だけではなく、「ヤギ」も含まれているからである。したがって、「羊肉」と言った場合、ヒツジの肉だけではなく、ヤギの肉も含まれているのである。表2-10で「羊肉」が大きく増大しているのは、ヒツジ肉の増大だけではなく、ヤギ肉の増大が大きく寄与しているのである。むしろ、ヒツジ肉よりヤギ肉の方の増大が大きいと見ておいた方がよいであろう。ただし、実際はどの程度かとなると、正確な検証は難しいであろう。ヒツジもヤギも両方飼っている場合が多いからである。

なお、表2-10の「家禽肉」、「兎肉」、「その他」の78年の欄が欠けているのは、統計が無いからであり、統計が無かったのは、当時は豚肉、牛肉、羊肉だけが肉類であり、その他のものは肉類としては認められていなかったことによるものと思われる。この3者を合計すると「合計」欄の数値と一致するからである。

表2-10 品目別肉類生産状況(単位:万トン)

年次	合計	豚肉	牛肉	羊肉	家禽肉	兎肉	その他
1978年	1062.4	1001.4	23.0	38.0	-	-	-
	(100%)	(94.3%)	(2.2%)	(3.6%)	-	-	-
1990年	2857.0	2281.1	125.6	106.8	322.9	9.6	11.0
	(100%)	(79.8%)	(4.4%)	(3.7%)	(11.3%)	(0.3%)	(0.4%)
2001年	6333.9	4184.5	548.8	292.7	1210.3	40.6	57.0
	(100%)	(66.1%)	(8.7%)	(4.6%)	(19.1%)	(0.6%)	(0.9%)
(01/78)	5.96	4.18	23.86	7.70	3.75	4.23	5.18

注:「家禽肉」、「兎肉」、「その他」の(01/78)の欄は(01/90)の計算値である。

出所:『中国統計年鑑』各年版。

中国の畜産統計については、注意しておくべきことがある。それは統計が繋がらないことである。具体的に説明すると、97年産の畜産統計を公表するに際して、中国の統計を主

管している国家統計局は、これまでの畜産統計には大きな水増しがあるとして、これまで公表してきた 96 年までの畜産統計を全て破棄したのである。そして、97 年の畜産統計を発表するときに 96 年の既公表値を修正して 96 年と 97 年の 2 年分を公表した。その後も前年に公表したものを再修正することが行なわれてきていた。例えば、98 年値を公表するときに 96 年、97 年の数値をさらに修正する如くである。ただし、ここ 2 年ほどは再修正や再々修正は無くなっている。とはいえ、「確定している」と言えるのは 95 年の数値までであり、それ以前のものは無修正のまま統計出版物に掲載されているのが実態である。その状況を示したのが表 2-11 である。表 2-11 には、1994 年の欄と 1995 年の欄との間に二重線を引いてある。両者を比較するとかなりの差がある。この差をどのように埋めるかは、統計や畜産の素人にとっては非常に難しい問題である。

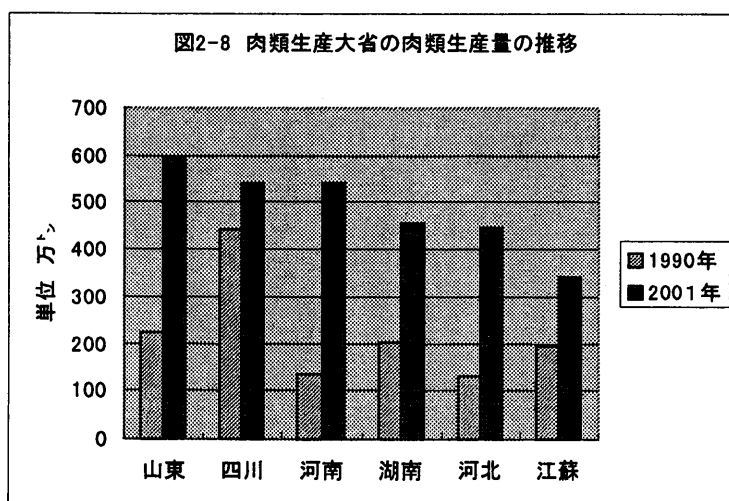
表 2-11 品目別肉類生産状況（単位：万トン）

年次	合計	豚肉	牛肉	羊肉	家禽肉	兎肉	その他
1994 年	4499.3	3204.8	327.0	160.9	755.2	22.9	28.5
1995 年	4076.4	2853.5	298.5	152.0	724.3	20.7	27.4
1996 年	4584.0	3158.0	355.7	181.0	832.7	23.7	32.9
1997 年	5268.6	3596.3	440.9	212.8	978.5	28.1	12.2
1998 年	5723.8	3883.7	479.9	234.6	1056.3	30.8	38.5
1999 年	5820.7	3890.7	505.4	251.3	1115.5	31.0	26.8
2000 年	6125.4	4031.4	532.8	274.0	1207.5	37.0	42.7
2001 年	6333.9	4184.5	548.8	292.7	1210.3	40.6	57.0

出所：『中国統計年鑑』各年版、『新中国五十年農業統計資料』。

2) 各省の肉類生産状況

各省別の肉類生産量は別表 2-8、図 2-8 のようである。



2001 年の実績で見ると、肉類の生産大省は、①山東、②四川、③河南、④湖南、⑤河北、⑥江蘇、⑦広東、⑧安徽、⑨広西、⑩湖北の順となっている（以上は上位 10 省）。これらの省の生産状況を 1990 年と 2001 年の対比で見てみよう。この間の全国の伸び率は 2.22 であるが、この全国平均を上回っているのは、①山東、③河南、⑤河北、⑧安徽、⑨広西の 5 省、下回っているのは、②四川、⑥江蘇、⑦広東、⑩湖北の 4 省、同水準なのが④湖南の 1 省となっている。生産の上位省の伸び率は鈍化するのが普通の状態と思われるが、①山東、③河南、⑤河北、⑧安徽、⑨広西の 5 省は平均以上の伸びを示している。中国の肉類生産はまだまだ伸びるということであろうか。ただし、上記で見たように、肉類の年間一人当たり供給量ベースでは、既に我が国の水準を超えている。肉類についても、現在の傾向をそのまま放置しておけば、早晚過剰問題が生じよう。

（6）牛乳

1）全国の生産状況

牛乳の生産は、これまで中国の農産物では最も弱いものの一つであった。一時期は対前年比がマイナスに転じたこともある。表 2-12 はそれを示すために作成したものである。即ち、97 年には前年比 4.5% の減産であった。しかしながら、翌年から増産に転じており、ここ 2 年の伸びは特に急速になっている。しかも、年間 100 万トンの以上の伸びとなっている。最近都市部を中心に飲用牛乳の消費が増大していることがその原因であろう。

表 2-12 中国の牛乳生産量の推移（単位：万トン）

年次	1996	1997	1998	1999	2000	2001
生産量	629.4	601.1	662.9	717.6	827.4	1025.5
増減率	100.0	95.5	105.3	114.0	131.5	162.9

出所：『中国統計年鑑 2002』。

中国では、牛乳の他にヤギ等の乳もかなりの生産がある。牛乳含めた動物の乳を中国語では「奶」と言うが、中国の統計では「奶類」の統計が先ずあって、牛乳はその内訳として計上されている。

表 2-13 牛乳とその他乳の生産状況（単位：万トン）

年次	1996	1997	1998	1999	2000	2001
牛乳	629.4 (85.5%)	601.1 (88.3%)	662.9 (88.9%)	717.6 (88.9%)	827.4 (90.0%)	1025.5 (91.3%)
その他乳	106.4 (14.5%)	80.0 (11.7%)	82.5 (11.1%)	89.3 (11.1%)	91.7 (10.0%)	97.4 (8.7%)
合計	735.8 (100%)	681.1 (100%)	745.4 (100%)	806.9 (100%)	919.1 (100%)	1122.9 (100%)

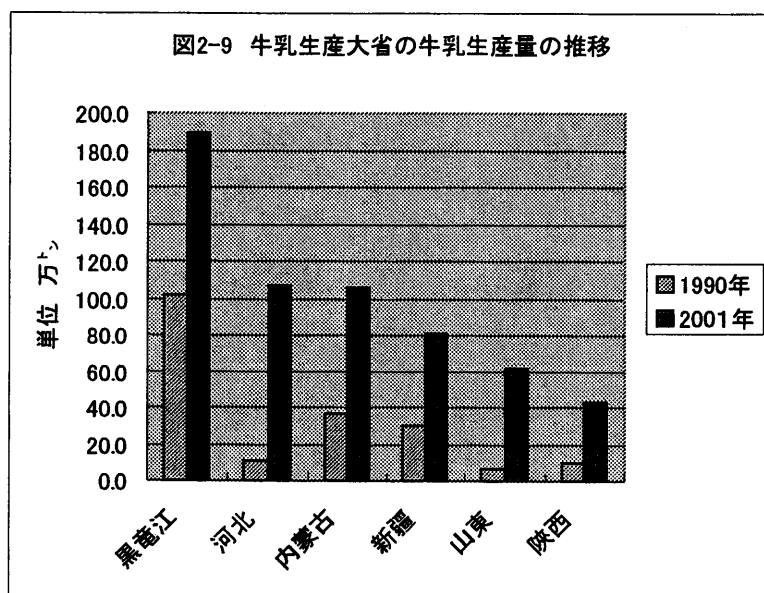
出所：『中国統計年鑑 2002』。

そこで、「奶類」とその他の乳との生産量の推移をまとめたのが表2-13である。表2-13に見るように、その他の乳の生産は伸びてはいるが、牛乳の伸びの方が遥かに大きい
ため、「奶類」でのシェアは低下している。

なお、ヤギ等の乳と記したが、ヤギ以外で考えられるのは水牛の乳があるが、量的には
ヤギの方が多いと思われる。ヤギ等の乳が多いのは山東、陝西、新疆である。このことか
ら、牛乳以外の乳はヤギの乳が主体であると考えておいて良いであろう。

2) 各省の牛乳生産状況

各省別の牛乳の生産状況は別表2-9、図2-9のようである。牛乳の生産には、大き
な地域性が見られる。中国を北方地区と南方地区とに分けると、牛乳の生産は圧倒的に北
方地区の方が大きい。ここでいう北方地区とは、北京、天津、河北、山西、内蒙古、遼寧、
吉林、黒竜江、山東、河南、陝西、甘肅、青海、寧夏、新疆の15の省であり、南方地区と
は、上海、江蘇、浙江、安徽、福建、江西、湖北、湖南、広東、広西、海南、重慶、四川、
貴州、雲南、チベットの16の省である。このことを象徴しているのが、海南省の生産が統
計上は消滅していることである。



省別には、黒竜江省が突出している状況には変わりがないが、河北、内蒙古、新疆の増
大が著しく、黒竜江との差は急速に縮小している。90年当時は、河北、内蒙古、新疆の3
者を合わせても黒竜江には及ばなかったが、2001年には3者の合計は黒竜江の1.6倍にま
で増大しているのである。もう一つ指摘しておくべきことは、都市近郊酪農もかなり進展
していることである。それを象徴しているのが、北京、天津、上海の生産量がかなりの水
準に達していることである。

(7) 水産物

1) 全国の状況

中国の水産物の生産量は、表2-1（5ページ参照）に見るように、1978年～2001年の間に10倍近くの伸びを示している。このことに関して良く表明される懸念は、中国も世界の海を荒し回ること、このような生産を挙げているのではないかということである。しかしながら、中国の遠洋漁業の力は大きなものではないので、こうした懸念は杞憂に過ぎないものであるか、あるいは意図的な中傷に過ぎないものである。漁業には、海面漁業（海水漁業）と淡水漁業（内水面漁業）があり、さらに、捕獲（漁労）によるものと養殖によるものがある。中国の漁業のこのような顕著な増大の中身を見るために作成したのが、表2-14である。即ち、海水漁業と淡水漁業に区分し、さらにそれぞれを捕獲と養殖とに分けたものである。

表2-14 漁業の海水・淡水別、捕獲・養殖別生産状況（単位：万トン）

年次	合計	海水合計	海水捕獲	海水養殖	淡水合計	淡水捕獲	淡水養殖
1978年	404.4	359.5	314.5	45.0	105.9	29.6	76.2
	(100%)	(88.9%)	(77.8%)	(11.1%)	(26.2%)	(7.3%)	(18.8%)
1990年	1237.1	713.3	550.9	162.4	523.8	77.9	445.9
	(100%)	(57.7%)	(44.5%)	(13.1%)	(42.3%)	(6.3%)	(36.0%)
2001年	4381.3	2571.7	1440.6	1131.1	1809.6	214.6	1595.1
	(100%)	(58.7%)	(32.9%)	(25.8%)	(41.3%)	(4.9%)	(36.4%)
(01/78)	10.83	7.15	4.58	25.16	17.09	7.24	20.93

出所：『中国統計年鑑』各年版。

先ず、海水漁業と淡水漁業の区分では、1978年～2001年の間の伸び率は、全体では10.83倍であるが、海水漁業が7.15倍に止まっているのに対して、淡水漁業の方は17.09倍の伸びとなっており、淡水漁業の方が海水漁業を大きく凌駕している。ただし、量的には海水漁業が2571.7万トン、淡水漁業が1809.6万トンであり、海水漁業の方が上回っている。

次に、捕獲と養殖の状況を見るために、表2-14を並べ替えして作成したのが表2-15である。捕獲と養殖とを比較すると、この期間内に明瞭にその地位が逆転していることが分かる。捕獲は78年には85.1%のシェアを占めていたが、2001年には37.8%に低下しており、他方、養殖は29.9%から62.2%へと拡大している。また、この間の伸び率は、捕獲は4.81倍に止まっているのに対して、養殖は22.49倍にまで増大しているのである。つまり、量的にも、シェア的にも養殖の方が捕獲を上回っており、中国の漁業は養殖を主体にするものに転換していることを示しているのである。

表 2－15 漁業の捕獲・養殖別、海水・淡水別生産状況（単位：万トン）

年次	合計	捕獲合計	海水捕獲	淡水捕獲	養殖合計	海水養殖	淡水養殖
1978 年	404.4	344.1	314.5	29.6	121.2	45.0	76.2
	(100%)	(85.1%)	(77.8%)	(7.3%)	(29.9%)	(11.1%)	(18.8%)
1990 年	1237.1	628.8	550.9	77.9	608.3	162.4	445.9
	(100%)	(50.8%)	(44.5%)	(6.3%)	(49.2%)	(13.1%)	(36.0%)
2001 年	4381.3	1655.2	1440.6	214.6	2726.2	1131.1	1595.1
	(100%)	(37.8%)	(32.9%)	(4.9%)	(62.2%)	(25.8%)	(36.4%)
(01/78)	10.83	4.81	4.58	7.24	22.49	25.16	20.93

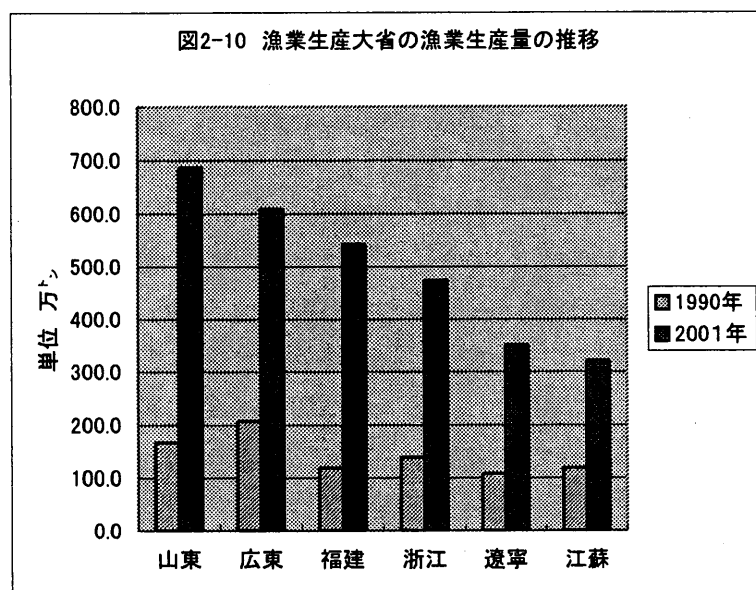
出所：『中国統計年鑑』各年版。

中国の水産統計について水増しを非難する意見があるが、ここでは、中国の水産統計が以前修正されたことがあることを紹介しておこう。それは 1996 年の統計からである。1996 年の漁業生産量は 3288.1 万トンであり、前年に比較すると 770.9 万トンの大幅増となっている。これは、通常の生産増の他に、統計の取り方が変えられたことによる増加分があったためである。

具体的にいえば、通常の生産増によるものが 295.8 万トン、統計の取り方の変更による増加分が 475.1 万トンである。そして、この統計の取り方の変更による増加分は、貝類の数値にかかるものである。中国が 96 年から貝類の統計の取り方を変えたのは、F A O の指摘によるものだと仄聞しているが直接には検証していない。なお、この統計の変更は、『中国統計年鑑 1997 年版』に両方の数値、即ち、変更前のベースによるものと変更後のものとを併記することで示されている。

2) 各省の水産物の生産状況

各省別の水産物の生産は別表 2－10、図 2－10 のようである。当然のことながら、海洋に面している省の生産が大きなシェアを占めている。



特に山東、広東は600万トンを超えており、わが国並の生産を1省で挙げている。海の無い省では、湖北省が240万トン余の生産を挙げているのが注目される。無論、養殖によるものがほとんどである。

3. 農地問題

(1) 農地資源の状況

1) 全国農地悉皆調査

ア. 全国の結果

中国の農地総面積の公表数字は、『中国統計年鑑』によって1995年までは「過少」との注釈付きで公表されてきていたが、96年以降の数字はしばらくの間公表が途絶えていた。これは、それまで進められてきていた全国農地悉皆調査の結果がほぼまとまったものの、その取扱について、中国政府部内での意見の調整に手間取ったためと思われる。推測されるのは、統計部門を所管する国家统计局と土地問題を所管する土地資源部との対立である。国家统计局にしてみれば、これまでの公表値との乖離が大き過ぎ、さらにその他の統計への影響も大きいからである。例えば、農地面積が既公表値より大きければ、これまで公表していた作物統計の修正が迫られ、その場合も、単収を下げるか、生産量上げるかの選択を迫られることになるからである。

この悉皆調査結果は2000年7月に公表されたが、それによる農地資源の現況(96年10月末現在)は次のようである(注: 1畝=15畓)

農地面積〔耕地面積〕	19.51 億畓＝1億3006.7万畓
(参考) 園地	1.5 億畓＝1000.0万畓
林地	34.14 億畓＝2億2760.0万畓
牧草地	39.91 億畓＝2億6606.7万畓